

もののふの やそおとめらが くみがふ てらいのうえの かたかごのはな
物部の八十少女らが汲みまがふ寺井の上の堅香子の花

かたくり & しばざくら

桜の花が咲くころ、逆井ではかたくりの可憐な花が人を集める。種子が地に落ちて八年もかかって花が咲くといひ、地上に姿を見せるのは二ヶ月ばかりで、あの十ヶ月は潜ったままでと聞けば、何かを避けるように下向きに咲く六花弁の淡い紫色に、人は愛惜の念さえ抱かされる。

市が昭和四十一年に、宇佐見さんの山地の北向き斜面の一部に囲いを作り、天然記念物に指定して保護を始め、それを市の花にした。宇佐見さん宅の話では、昭和三十年代には、かなり咲いていて、盗掘がひどかったという。

かつては、鱗茎から良質の片栗粉をとった。いまはジャガイモの澱粉らしい。

かたくりの種子には、エライオゾームという脂肪酸がくっついていて、これが大好きのアリが巣に運ぶ。こうしてかたくりは移動し、群生するという。

← かたくりを見てから、坂道を戻り、南逆井とは逆に歩くとしばざくら満開



もうひとつの市の花は、しばざくらである。かたくりは保護、しばざくらは普及、と市ではいう。こちらは北アメリカの原産。花語草ともいい、桜に似た花が咲き、じゅうたんのように広がることから命名らしい。

冒頭に掲げているのは万葉集から大伴家持の一首。堅香子（かたかご）というのがかたくりである。たくさんの少女たちが「入り乱れて水を汲んでいる」と解釈されているが新説もある。

来月八日は、かたくり祭り。甘酒をいただくに歩きましょう。

逆井漫歩 30

平成13年3月